

第12回「最新！ 現地取材レポート」

日時：9月19日(水) 午後7時～午後8時30分

会場：龍谷大学 大阪梅田キャンパス 研修室

講師：玉本 英子

アジアプレス・インターナショナル

URL <http://asiapress.org/>

玉本英子の現場日誌

URL <http://www.asiapress.org/apn/archives/2000/1053/>



第12回は、アジアプレス・インターナショナルの玉本さんに講師を務めていただきました。アジアプレス・インターナショナルは、文章や写真、映像を通して、世界の様々な問題を伝える独立系ジャーナリストの組織です。玉本さんは、クルディスタン、コソボ、アフガニスタン、イラクをはじめ、紛争や圧政下で生きる市井の人々に焦点を当て取材を続けてきました。「明日起こる危機～コソボ」(テレビ東京)、「イスラムに生きる～公開処刑されたアフガニスタン女性」(NHK 総合)をはじめ、イラク武装勢力「アンサー・スンナ軍」「イラクの聖戦アルカイダ機構」へのインタビュー(2005)、イラク軍従軍取材(2007～2010)などテレビ中継を含めた多くの実績があります。

講義概要

今年4月にミャンマー連邦議会補欠選挙が行われたミャンマー連邦共和国(ビルマ)*の様子、イラク・イラン国境近くで起こったフセイン政権時の悲劇ハラブジャの毒ガス攻撃、内戦状態に陥ったシリアの国境地帯難民キャンプの三か所での取材活動を中心に、最新の映像を交えてご報告をしていただきました。最後には、今夏、シリアで銃撃を受け、命を落としたジャーナリストの山本美香さんのことにも触れてお話し頂きました。

* 軍政下で「ビルマ」から「ミャンマー」に変更された点で、米英両国などは「ビルマ」で通していたが、現在は状況も変化しつつあり、特定の民族をさす言葉ではない「ミャンマー」が用いられる場合も多く、現地では元々「ミャンマー」といわれてきたことなどから講座では「ミャンマー」で統一した。

ミャンマー連邦共和国：議会補欠選挙とアウンサンスーチー

2007年、旧首都のヤンゴンで民主化を求めるデモが行われ、治安部隊や軍隊が市民に発砲し、取材中の日本人ジャーナリストを含む数人の死亡が確認されました。玉本さんは、その3年後ミャンマーを訪れ取材を行います。当時は入国ビザの取得も困難で、公安警察に追われながら取材活動を行ったそうです。しかし、2012年、長期にわたる軟禁生活を終えた民主化運動の指導者アウンサンスーチー(以下、スーチーとする)が、ミャンマー連邦議会補欠選挙にNLD(国民民主連盟)から立候補し正式に議員として就任しました。

今年、玉本さんは再びミャンマーを訪れ、選挙に沸く街や村の様子やスーチーの記者会見などを取材しました。スーチーは今回の選挙について「民主化の第一歩であり、若い人が国の将来に関心を持ってほしい」と訴えます。会見場には各国のメディアが多数訪れ、民主化への期待が感じられました。一方、記者会見では外国メディアが彼女をカリスマとして扱う行為に玉本さんは違和感を覚えたそうです。また、ヤンゴンの繁華街は活気があり、女性はとてもファッションナブルです。以前では考えられないことですが、スーチーの顔が印刷されたTシャツが飛ぶように売れ、町は「スーチーブーム」に沸いています。以前の厳しい雰囲気とは異なり、街のいたるところで「民主化」と「アウンサンスーチー」への大きな期待が感じられます。

イラク：ハラブジャの悲劇

日本ではあまり知られていませんが、イラク・イラン戦争末期の1988年、イラク北東部の町ハラブジャで、政府軍が住民に対し化学爆弾を投下し、5,000ものクルド人が犠牲となりました。アルビルで米国司法人権団体支部の代表を務めるサミ・ジャラルさんは現在、ハラブジャ化学兵器被害者協会のメンバーとともに、ハラブジャ事件での化学兵器製造に関与したと思われる企業の調査を行っています。そのリストには、兵器や化学物質の原材料の納入や技術提供に関係した500を超える企業、機関が掲載されており、中には日本企業も含まれています。

当時、イラン・イスラム革命の影響を懸念した西欧諸国は、イラク政府による民間人への化学兵器使用を看過し、神経障害や呼吸器疾患などの後遺症に苦しむ人々への医療支援も十分ではありませんでした。サミさんは、今後訴訟を通じて人道への罪を問い、被害者救済のための補償を求めようとしています。ハラブジャ虐殺事件の調査については、ナチスドイツのユダヤ人虐殺の責任を追及する団体がクルディスタン地域政府に協力を表明しており、また、アメリカの弁護士達がこの活動の支援資金を拠出しています。

サミさんは、「政権崩壊後、この事件の解明がうやむやになってしまった。当時のフセイン政権に協力した企業に責任はないのか。この虐殺は世界が関係していることを知ってほしいし、2度と起きてはならない」「原爆投下を経験した日本が、このような非人道的な事件に関与していたことに憤りを感じる」と声を強めました。



88年に政府軍によって毒ガス爆弾が落とされたハラブジャ事件の男性被害者 (2012年玉本撮影)

シリア国境地帯：内戦の激化、兵士の離脱、難民の急増

シリアでは政府軍と反政府勢力の自由シリア軍が事実上の内戦状態に突入しています。戦闘を逃れるため東隣のイラクには8,000人以上のシリア人が避難し、いまでも1日に100人以上の人びとが国境を越えて避難してきます。玉本さんは、シリア国境に近いイラク北西部の難民キャンプを夏に訪

Syrian refugee camp イラク北西部のドミズ難民キャンプ。
イラクでもシリア難民は急増している。(2012年6月玉本撮影)



れました。国際機関やNGOからの支援で、水と食料のほか、生活必需品は支給されます。しかし、日中は45度にも達するキャンプでの生活、戦闘の激化にともない急増する避難民の数など、状況は決してよくありません。玉本さんは、キャンプの状況取材しながら、政府軍から逃れてきた離脱兵の取材を試みました。ある脱兵はデモ鎮圧部隊に投入され、デモ隊を撃たなければ殺すと上官に言われ、賄賂を払ってその場を逃れ、休暇中にキャンプにたどり着きました。「1,200人いた旅団の兵士のうち200人はすでに逃げた。賄賂を払えない貧しい兵士が戦闘を続けさせられている」と訴えます。シリア人権監視団(イギリス)は昨年3月に政府軍が住民弾圧を開始して以降の死者が2万3千人を超えたと発表しました(8月14日現在)。しかし、実際にどれだけ多くの命が失われたのかは不明です。



イラク・シリア国境近くの村で
中央が玉本さん (2012年7月現地通訳撮影)

注意：本レポートで使用されている写真の画像および部分使用は禁止します。